
始まりと終わり

華月 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりと終わり

【Nコード】

N0664B

【作者名】

華月 凜

【あらすじ】

実際にあった恋バナを書いてみました。

(前書き)

実在した人物の名前は伏せてありますので、御了承下さい☆

叶わない恋とか実らない恋なんて私はしらないと思ってた。
でも私は恋をした・・・

もう夏の匂いが漂う梅雨の季節
雨がザアザア音を立てて降っている。
教室の中。

あなたの声がよく響く。
私はずっとあなたの方を見ながら、あなたが話しているのを耳を澄
まして聞いていた・・・

楽しそうに話しているあなたはまるで子供みたい
授業が終わっても、
あなたは男の子達と話していて笑い声を絶やさない・・・

あっ・・・目合った。

あなたはにっこりと笑ってくれた。
それだけで私は胸が熱くなった。

昼休みー

あなたは必ず学食を使い窓際の席に座って、一人で食べている。
でも次々とみんなに話しかけられて、あなたの周りにはいつしか話
し声でいっぱいになる・・・

でも、今日は珍しく一人で食べていた。
私は緊張しながらあなたの前に立った。

あなたはゆっくり顔を上げて、私を見るとまたにっこりと笑った。

「おう♪」

あなたが久しぶりに私に掛ける第一声。

「一緒に食べてもいい？」

「どうぞ、どうぞ。」

久しぶりやん♪長谷川と食べんの。」

私は嬉しくて顔がほころんでしまつて、口が緩む
それを見てあなたは笑った。

「お前いつつもそうやって笑ってたら、友達できると思うで？」

「・・・いない。」

私には宏樹がいるし♪」

なんて冗談で名前を出してみる。

あなたは少し困った顔をして、ハハッと笑った。

私に友達なんていない

友達なんて作ればこの恋がばれて終わってしまう気がする。

恐い・・・。

あなたがポケットの中を探って携帯を出し、画面を見ると少し微笑んだ。

メールの相手は決まっていつもあなたの大切な人

私の心は嫉妬でいっぱいになる。

いつだったかアドレスを聞いて、まだメールできずに使われないアドレスは、まだおかれていた。

もうすぐ授業が始まってしまう。

あなたが席を立った。私は自分の手をぎゅっと握った。

「俺、行く所あるから長谷川教室行っとけよ。」

「わかってるよ。宏樹もまた教室来るんでしょ？」

「そりゃ、行きますよ。」

「じゃあね。」

「おう♪」

会話が終了した。

また何一つ宏樹のコトを知れなかった。

学食を出る時、大きなため息が出た。

外は灰色。

大粒の雨。

私はもう二年もあなたを想ってるよ・・・

なのにあなたの事を一つも知らないなんて笑える

わざと雨に濡れるように学食から離れた。

雨は冷たくて私の体を すぐに冷やした。

このまま体も心も完全に冷めてしまえばいいのに
私なんか消えてしまえばいいのに・・・

「長谷川？」

もうとつくに授業が始まって、周りには誰もいなかった。
なのに急に声が聞こえて前方を見ると、宏樹がいた。

宏樹は小走りで私の所に駆けてきた。

「何やってんだ！こっち来い！風邪ひくだろう？」

宏樹は屋根のある方に私を引っ張った。

でも私はそれを払いのけた。

「ほっというて！！」

もう・・・私にかまわないで！」

勝手に涙が溢れて止まらなくなって、まるで子供のようにわめいた。

かつこ悪い・・・

こんな顔も姿も見せなくなかった。

・・・もういいや。

何もかもさらけ出して　消えてしまえばいい・・・

「長谷川。どうした？」

何かあったん・・・？」

もう・・・いいよね・・・

「好きだよ・・・。宏樹が・・・好きだよ。もうずっと、
前から・・・。」

私は宏樹の目を見て訴ったえていた。

宏樹の驚嘆と困惑の表情

「……ごめん……。」

そう、宏樹がはせる言葉はたったこの一言だけ。たったこの一言で私の二年の想いは無駄な時となる。

わかっていた……

わかっていたはずなのに

どうしてこんなに好きなんだろう……

どうしてこんなに欲しいんだろう……

どうしてこんなに苦しいんだろう……。

宏樹が好きだよ。

下を向いてうつむく宏樹の前に近づいて、宏樹の片方の肩に手をの

せて、下から顔を近づけて

キスをした……。

一瞬のコトだった。

もしかしたら、私の思い違いだったかもしれない

この時、宏樹は私のキスを拒む事もできたはずなのに、受け入れ

てくれたような気がした……。

冷たくて、ひどく気持ちの悪いキスだった……

それでも私にとっては 気持ちのいいものだった

「バイバイ……先生……」

もう私達が言葉を交わす事も一緒にごはんを食べる事も　もうない
だろう

ほら、今日も学校の授業が始まった。

今日も雨の中あなたの声が響いている。

私は教卓に立つあなたを見る。

あなたも私を見た。

また雨の中私は食堂の外れた所に立って、濡れていた。
目の前にはあなたがいてただ私を見ていた。

この雨が終わりなのか　始まりなのか、私には　よくわからない。
・
・
・

f i n

（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます。この結末はみなさんの想像におまかせします☆笑

それでは次回作の

「君と罰と私」も読んで 頂ければ嬉しいです★

凜でした☆

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0664b/>

始まりと終わり

2011年1月21日02時56分発行